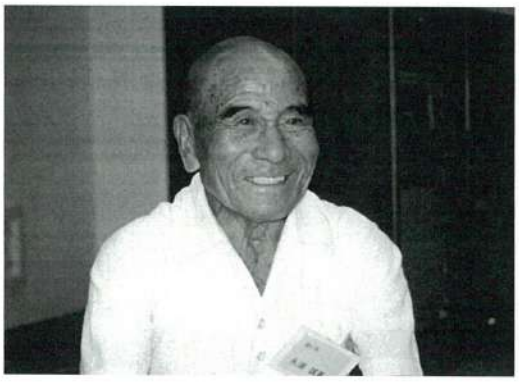
民話　声の図書室



「民話　声の図書室」が目指すもの

口から耳へ、耳から口へと、語り伝えられてきた物語のすべてを総称して、わたしたちは「民話」と呼んでいます。文字が読めなくても、書く筆がなくても、「語り」「聞く」という営みによって、生き生きとそこに繰り広げられる世界です。そんな「民話」を聞かせてくださる方を探し求める旅を、わたしたちは40年近くつづけてきました。

あるときのことでした。訪れた山奥の小さな村で出会ったおばあさんは、90歳でした。その歳になるまで、ほとんど村を出ることなく過ごしてきたということでしたが、おばあさんの口からほとばしるように語り出された民話は100話を超えました。

日本文化の高い峰を支えた無名の人たちの生きる喜び、厳しい自然への畏れ、苦難を生きるための活力に満ちた笑い、これらが、語られた民話ひとつひとつに宿っていました。

地下水が脈々と流れ続けて、恵みをあえてくれるように、語り継がれてきた民話の数々も、汲み上げてその恵みを受け取ってくれる人を待って、命を燃やし続けているのです。

わたしたちは、語ってもらった民話を、先祖から贈られた遺産として多くの人と共有したいと考え、『みやぎ民話の会叢書』と名付けた民話集の発行を続けました。

しかし、もともと口で語られた民話です。活字に置き換えると、ことばは音を失って、ぐったりと横たわってしまいます。語られる声に宿っていたのどかさ、野放図な笑い声、涙とともに語られたせつない嗚咽など、活字では到底伝えられないもどかしさをいつも感じてきました。

いま取り組んでいる「民話　声の図書室」は、まさにこの悩みに光を差し込んで、活字のなかに鎖(とざ)されていた語り手の声を、多くの人のもとへ解放する場になるはずです。山の村や海辺の町で、誠実に人生を生きた多くの語り手たちの声をじかに聞いてほしいと思います。

また、できるだけ多くの語り手の声を聞くことができるように作業をすすめています。たとえば、「笠地蔵」の民話ひとつを取っても、いろいろな地域で語られているさまざまな「笠地蔵」を聞いて、その違いを知ることで、「土地」「土着」ということの意味を、あらためて考えることができます。

民話を聞いてみたい人、語ってみたい人、興味を持っている人、とにかくどんな角度からでも、この部屋に入ってきて、ともに民話の深い森を歩くことができれば、どんなにうれしいことでしょう。

みやぎ民話の会

みやぎ民話の会

みやぎ民話の会は、40年前にスタートし、宮城県を中心に山の村や海辺の町を歩いて、そこで聞いた民話を、ひとつふたつと記録する作業を、ただ愚直につづけてきました。20名足らずのまことに小さいサークルです。

そこで聞く民話の面白さにひかれ、それを語ってくださる人たちの誠実な生き方に魅了されての年月だったと思います。お会いして話を聞かせてもらった方はどのくらいになるでしょうか。お聞きした民話は、また数知れず、これを多くの方に知ってほしくて、その一部を今日までに、『みやぎ民話の会叢書』として、まとめてきました。

叢書は、常に一人の語り手から聞いた民話で1冊を編んできました。単に民話を集めた民話集ではなくて、民話が生れる背景や、語る人の人生が一話を深く彩ることに、わたしたち自身、教えられることが多かったので、それを表現できればとの思いから、一人の語り手にこだわりました。

さらに、この貴重な文化遺産を文字ではなくて、肉声でも聞いてほしいと願って、語り手と膝を交えて過ごすための時間を設定しました。それを「みやぎ民話の学校」と名付けました。語り手のみなさんから、暮らしの話をはじめ、この世の中のこと、人生のこと、言ってみれば社会の土台を支えて暮らす方々からこそ学ぶ、そのための「学校」です。

もうひとつ、近年盛んになっている、民話を活字から学んで語ろうとする新しい語り手の人たちのために、地域に生きている伝承の語りにじかに触れてもらうことは、きっと良い勉強になるだろう、その機会になればと願いました。

そして、1年おき、2年おきに、「学校」を開いてまいりました。

民話を訪ねて　聞く、聞く、聞く・・・

みやぎ民話の会の歩み

◇1975年　みやぎ民話の会を結成。　代表　小野和子（会員６名）

◇1977年　会報発行。（後に民話誌『民話』と改名：現在までに27号を数える）

◇日本児童文学者協会編「ふるさとの民話」シリーズのうちの『宮城県の民話』（偕成社・1982年刊）を担当。（現地編集責任者：小野和子）

◇1985年４月～1988年３月の３カ年、宮城県教育委員会文化財保護課の委託を受け、小野和子を責任者として、宮城県内の民話伝承調査に従事。その結果を、宮城県文化財調査報告書第130集『宮城県の民話』（B５版490ページ）としてまとめる。

◇1985年から，会員が採訪してきた記録を「みやぎ民話の会資料集」として、その都度記録する。（現在までNo. 484冊を作成する）

◇日本民話の会発行『民話の手帳』誌（No. 38号1988年刊）『特集　宮城県の民話』の編集を担当。（編集責任者　小野和子）

◇採訪によって聞き取った民話の活字化を図り、多くの人々に、この先祖の遺産を手渡したいという願いから、1991年から『みやぎ民話の会叢書』という民話集を発刊。現在まで、13集（15冊）を数える。

◇1994年　日本民話の会共催「夏の民話学校 in 栗駒」（於　いこいの村栗駒）を開催。

◇1996年　みやぎ民話の会主催「第１回みやぎ民話の学校」を開催。以来、隔年で開催し、広く一般に呼びかけ、伝承の語り手を囲んで、その語りや暮らしの話などを聞く場を設定した。

◇2003年１月より、みやぎ民話の会の代表 山田裕子、顧問 小野和子とする。

◇2011年　3.11の震災に際し、仮設住宅などで民話を語り、被災者の心になぐさめをもたらすことを願って奉仕する。

◇2011年８月21～22日、「第７回みやぎ民話の学校」を南三陸町ホテル観洋（当時まだ避難所だった）で開催。宮城県内で被災された民話の語り手６名を招いて、その体験を語っていただく。全国から200余名の参加者が集まる。（『みやぎ民話の会叢書』13集参照）

◇2012年７月から、せんだいメディアテークとの協働で「民話　声の図書室」を開設すべく、これまでに集めた民話の収録テープ（約1000本）の整理に取り組んでいる。

◇第１回「みやぎ民話の学校」から参加くださっている３名の伝承の語り手 伊藤正子さん（宮城県登米市）、佐藤玲子さん（宮城県栗原市）、佐々木健（つよし）さん（岩手県遠野市）の語りを映像で残すべく、映画監督濱口竜介、酒井耕の両氏（せんだいメディアテーク「３がつ11にちをわすれないためにセンター」に参加）による口承記録映画「うたうひと」の制作に協力。

みやぎ民話の学校

最近、「民話を語ろう」という動きが各地で波のうねりのように高まっています。語ろうとする人々の中には、活字を通して民話を知ったという方も多く、「伝承の語り」に接することなく民話の語りに挑戦される場合もあります。

こうした人々に、伝承の語りを肉声で聞いてほしいと願って、伝承の語り手と膝を交えて過ごす場を設定し、それを「みやぎ民話の学校」と名付けました。

いつも、10名前後の「伝承の語り手」をお招きし、民話の語りだけでなく、暮らしの話や人生のことなどを、泊まりがけで語り合う「学校」としました。2年おき、ときには3年おきに、「伝承の語り手」から学ぶためのテーマを決め、これまでに7回「みやぎ民話学校」を開いてきました。このような「学校」の開催を重ねながら、伝承の語りを一方的に聞くだけでなく、「語る」「聞く」とは何かについて、聞き手自らが考えたり、語り合ったりする場の必要性を痛感するようになりました。地域に赴き、じっくりと語りが聞けるような「学校」開催をめざしています。

第1回　1996年8月5～6日　中新田交流センター
テーマ　**「夏のひととき“むかしばなし”の世界へ ーさまざまなこと、語り語りすっぺー」**
語り手　永浦誠喜・只野とよ・大友かのえ・伊藤正子・楳原村男・佐藤玲子・山内郁・小松仁三郎・佐々木健

第2回　1998年8月19～20日　仙台市　茂庭荘
テーマ　**「語りの中になにかを見つけてみませんか」**
語り手　永浦誠喜・只野とよ・伊藤正子・楳原村男・佐藤玲子・山内郁・小松仁三郎・佐々木健・熊谷はつよ・鈴木悦郎・大庄司たか子・庄司アイ・佐藤新六・遠藤恵子

第3回　2000年8月22～23日　仙台市　茂庭荘
テーマ　**「暮らしの中に生きる民話 ー山の語り、里の語り、浜の語りー」**
語り手　永浦誠喜・只野とよ・伊藤正子・楳原村男・佐藤玲子・山内郁・小松仁三郎・佐々木健・熊谷はつよ・鈴木悦郎・庄司アイ・伊藤旭・佐藤とし子・遠藤恵子

第4回　2002年8月4～5日　川渡公民館・鳴子玉造荘
テーマ　**「夏のひととき、民話の世界へ　どうぞ　ーたのしもう　あじわおう　宮城の民話ー」**
語り手　只野とよ・伊藤正子・楳原村男・佐藤玲子・山内郁・小松仁三郎・佐々木健・熊谷はつよ・鈴木悦郎・伊藤旭・佐藤とし子・遠藤恵子・高橋敏幸

第5回　2005年8月20～21日　鳴子温泉　ねまりこの宿ますや
テーマ　**「鳴子　宮城　そして全国へ　ーむがし語りの種っこ見つけでみっぺ　育してみっぺー」**
語り手　只野とよ・伊藤正子・楳原村男・佐藤玲子・山内郁・小松仁三郎・佐々木健・熊谷はつよ・鈴木悦郎・佐藤とし子・遠藤恵子・高橋敏幸・大場重代・中島良・引地田路子

第6回　2008年8月22～23日　松島ホテル壮観
テーマ　**「七ツ森の里で語りの座を結ぼうー語りにこめられた心をさぐりつつー」**
語り手　山内郁・佐藤とし子・大場重代・引地田路子・秋山すえの・泉田清子・君ヶ袋ちゑこ・今野満子・曽根つき子・土見壽郎

第7回　2011年8月21～22日　南三陸町ホテル観洋
テーマ　**「2011. 3. 11　大地震　大津波を語り継ぐために**
ー声なきものの声を聴き　形なきものの形を刻むー」
語り手　小野トメヨ・庄司アイ・鈴木善雄・土見壽郎・高橋武子・仲松敏子

「みやぎ民話の会叢書」一覧

第１集 「みやぎのわらべうた　春夏秋冬 ―佐藤義子の唄と語り―」（157 頁）
1991 年３月 31 日発行

第2集 「みやぎのおさないひとたちのためのむかしばなし ―小野和子 再話―」（130頁）
1992 年３月 31 日発行

第３集 「むがす　あったづぉんな　ほれ ―大友かのえの語り―」（278 頁）
1994 年７月 31 日発行

第４集 「新六ずんつぁんのおもしぇ話 ―佐藤新六の語り―」（257 頁）
1996 年６月 30 日発行

第５集 「唄ってけらぇん　語ってけらぇん ―只野とよの唄と語り―」（274 頁）
1996 年７月 31 日発行

第６集 「むがす　むがす　ずうっとむがす ―佐藤玲子の語り―」（300 頁）
1998 年８月 10 日発行

第７集 「どーびん　さんすけ　さるまなぐ ―小松仁三郎の語り―」（261 頁）
1999 年２月 20 日発行

第８集 「土地に根ざした民話 ―砂金範男・千葉直次の語り―」（263 頁）
2000 年１月 31 日発行

第９集 「『母の昔話』を語り継ぐ ―伊藤正子の語り―」（416 頁）
2000 年８月 10 日発行

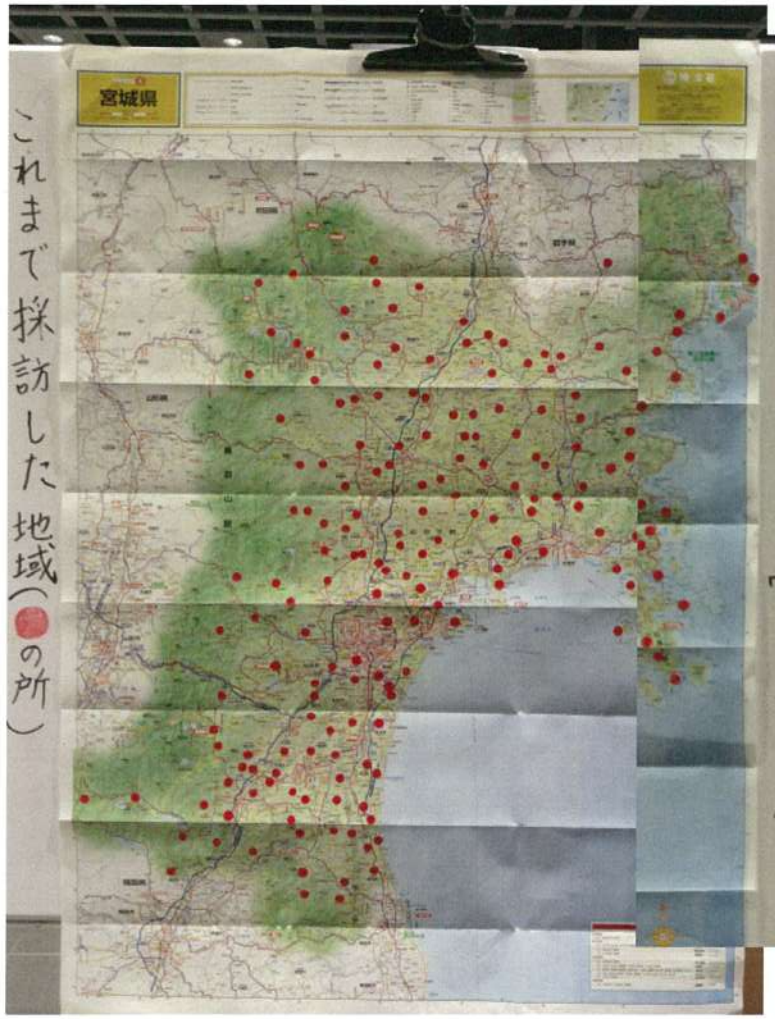
第 10 集 「青島屋敷老翁夜話　―永浦誠喜の語り―」上・中・下巻（876 頁）
2001 年 12 月 28 日発行

第 11 集「栗駒町猿飛来の伝承 ―楳原村男翁の唄と語り―」（318 頁）
2005 年８月 10 日発行

第 12 集「南三陸町入谷の伝承 ―山内郁翁のむかしかたり―」（354 頁）
2009 年 11 月 13 日発行

第 13 集「2011. 3. 11　大地震　大津波を語り継ぐために
―声なきものの声を聴き　形なきものの形を刻む―」（252 頁）
2012 年３月 11 日発行

民話　声の図書室　展示風景



これまで採訪した地域（●の所）

〈採訪〉とは？

民話を語ってくださる方をたずねて民話を聞くという営みを「採集」といったり「採話」と言ったりする場合があります。

ただ、私たちは、語ってくださった方と、「語ってもらった民話」は、切り離せないものと考えています。だから「採集」と「採話」という言葉を使いません。そのかわりに「採訪」といっています。

この「採訪」という言葉にこめたわたしたちの思いは、「民話」を「聞く」ということは、全身で語ってくださる方のもとへ「訪う（おとなう）」ことだと考えているからです。

そこで、語ってくださる方と聞く者が、時には火花を散らしながら、もう一つの物語の世界に入っていくことによって、深くつながっていくのだと考えています。

訪ね歩く

地域を選び、その土地に足を踏み入れて、一軒一軒「小さい頃に聞いた民話を記憶されていませんか？」とたずね歩きます。運よく民話を聞くことができたならば、それを大切に記録します。（テープやメモ）

資料集をつくる

聞いた話を採録したテープを文字に起こします。それを資料集という形にまとめて会員で共有します。

資料集は、現在485冊になりました。

みやぎ民話の会 叢書をつくる

資料集のなかから民話を選んで「みやぎ民話の会叢書」として発行しています。叢書は原則として一人の語り手で一冊を編んできました。なぜなら民話は語った人の暮らしや人生と深くかかわってくるからです。

叢書は今までに13集（15冊）発行しました。1冊約300ページ前後です。

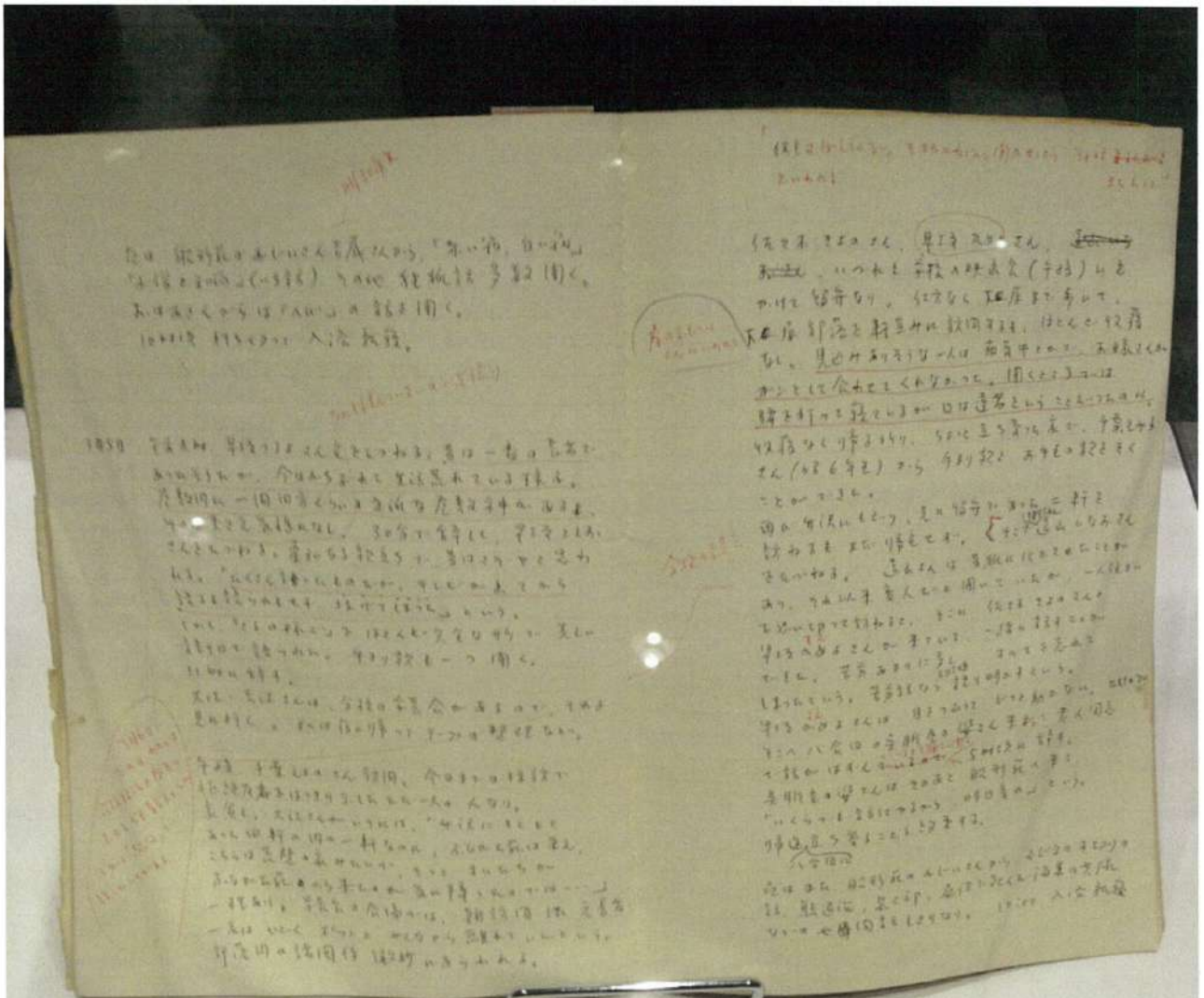
みやぎ民話の学校

叢書は活字によって民話を伝えますが、活字からこぼれ落ちたものをみなさんに伝えたいという願いがあって、「みやぎ民話の学校」を開いてきました。この学校の先生は、語り手のみなさんです。多いときは、15人の語り手のみなさんに来ていただいて、一晩や二晩、膝をつきあわせて、さまざまなお話を聞かせていただきました。

「第7回みやぎ民話の学校」は、2011年3月11日「大地震 大津波を語り継ぐために 一声なきものの声を聴き、形なきものの形を刻む」をテーマに、沿岸部で被災された語り手6人のみなさんに3月11日の体験をお話していただきました。

民話 声の図書室

「学校」や「叢書」からもれた膨大な民話を採録したテープの記録が私たちの手元にあります。これは、先祖が送ってくれた大事な遺産なので、多くの人と共有したいと考えていたときに、メディアテークから「民話 声の図書室」の提案をいただきました。これは、長い作業になるでしょう。みなさんの協力をいただきたいと思います。



＜採訪日記＞

採訪に出かけた日の様子を

記しています。

（1972年3月5日分）

語り手紹介

《佐藤 義子（さとう よしこ）【叢書第一集】

大正九年（一九二〇）宮城県栗原郡岩ヶ崎町（現栗原市栗駒岩ヶ崎）に生まれる。薬剤師の父と助産婦の母のもと、四人兄弟の二子として育つ。家業は岩ヶ崎の薬局で、父からは昔話を、母からはさまざまな唄を伝えられる。東京に進学して薬剤師の資格をとり、故郷岩ヶ崎で教壇に立った後、結婚して旧満州に渡る。夫は現地で出征、義子さん一人帰国後、夫の戦死を確認する。その後、仙台に移住して家庭を築き、一男一女に恵まれる。薬剤師の仕事のかたわら、仙台の文庫活動の先がけである「小ぼと文庫」をひらき、幼いころ身に蓄えたわらべうたや遊びを、子どもたちに伝えることに力を注ぐ。平成十五年（二〇〇三）逝去。「わらべうたに見込まれて、住みつかれた人」である。

それにしても、こんなにたくさんのわらべうたを克明に記憶して、育てつづけた人はまれです。義子さんの口から、つぎつぎと出てくるわらべうたをきき、うたにともなう遊びを教えてもらいながら、ふしぎな感動にいくどもおそわれました。こういうとき、伝承される昔語りやうたは、それ自身が生命あるもののように見えます。目に見えない生命力をもっていて、この人と見込んだ人の身体にしっかりと宿り、時がくるのを待って、ほとばしり出てくるように見えました。わらべうたに見込まれて、住みつかれた人、それが義子さんでした。

（『みやぎ民話の会叢書第一集　みやぎのわらべうた春夏秋冬』はじめに）

大友 かのえ（おおともかのえ）

【叢書第三集】

大正九年（一九二〇）宮城県志田郡三本木町大字秋田（現大崎市三本木秋田）に大友家の第一子、長女として生まれる。父豊幸（とよき）さんは、かのえさんが二歳の年感冒で急逝。ひとり娘のかのえさんが戸主となる。曾祖母、祖母に育てられ、囲炉裏端、布団の中などで二人からかわるがわる昔話を聞く。曾祖父は旅絵師、六部、人形芝居の人たちをよく家に泊めた人で、彼らがさまざまな話を運んで来たのではないかという。また大友家は地域の神楽の練習場として機部屋を貸しており、祭り近くには毎晩囃子と口説きの声が響いた。祖母がかのえさんの娘をあやすときの子守唄は、神楽の口説きであった。昔話を聞かなくなった十歳以降は小説を読むことに没頭し、読み始めると一冊読み終えないと気がすまず、また唄や踊りも大好きで、気にいった唄は最後まで覚えないと気がすまなかった。その後、婿に迎えた春治さんと結婚。戦争中に春治さんが召集され、五年間シベリアに抑留されて、昭和二十三年に帰国。その間、かのえさんが農作業を担って大友家を支える。かのえさんの長男敬一さんは、春治さん帰国前の昭和二十三年に腎臓を患って数え六つで夭折されている。その後、夫婦二人で農業に従事し、夫春治さんは昭和六十一年（一九八六）、かのえさんは平成十年（一九九八）逝去。一人で家業を担った戦中戦後、一番苦しい時代のかのえさんを支えたのは、幼いころから大好きだった昔話と唄の力であった。

そんなまつよさんの血を受け継いだのか、かのえさんもまた小さい時から。うたや踊りが好きであった。気に入ったうたは、最後まで覚えないと気がすまないし、三度聞いたら忘れないという。かのえさんは戦争中と戦後、夫の春治さんが召集されて、一人で大友家を支えて働き続けたが、農作業をしながら、いつでもうたを口ずさんでいた。あるとき、近所のおじんつぁんに、「かのえさん、もぞこくなくて（かわいそうでなくて）いいこだなあ。おやじさまいなくても、いつもうたっこがけているもの（うたっているもの）」といわれた。つらい仕事のなかで、うたがはりあいだったと、かのえさんは語る。

（『みやぎ民話の会叢書第三集　むがす　あったづぉんな　ほれ』p.268）

《

佐藤 新六（さとう しんろく）

【叢書第四集】

大正九年（一九二〇）宮城県栗原郡姫松村大字片子沢（現栗原市一迫片子沢）の秋山家に生まれる。六人兄弟の末子、四男として育つ。主として祖父仲蔵さんから、作業場で藁仕事のかたわら昔話を伝えられる。新六さんはそこで覚えた昔話を、尋常小学校の教室で披露して先生や同級生を驚かせたという。軍人を志し、昭和十四年（一九三九）家族に隠して陸軍を志願し、同年朝鮮へ出征する。極寒の中での厳しい訓練と新兵いじめに耐える毎日を送り、翌年には郷里の母の訃報が届くも、特別編成下の部隊のため帰国は許されなかった。同十六年太平洋戦争開戦の年に陸軍伍長となる。同二十年終戦を目前にして済州島防御の命が下ったおり、郷里の父の訃報が届く。こんどは帰省が可能な立場にあったが、一晩熟考の末帰省しないことを決意、済州島に渡る。終戦の詔勅は済州島で聞く。戦後、鶯沢町の佐藤家に婿入りする。「とっけ精進」と題して戦争体験をみずから克明に記録し、また記憶していた多くの昔話も文字として記録し、大部な原稿を作成する。晩年は地域の学校や会合で、昔話を語ることにも力を注いだ。平成十六年（二〇〇四）逝去。「とっけ（おどけ者）」というあだ名は、新六さんがみずから許した自画像でもある。

新六さんからこれまで百話余りの昔語りをお聞きしたが、その内容を見ると、笑い話が実に多い。本書には十三話を掲載したが、この他にもいろいろな笑い話を聞かせてもらった。「ダレダ、ダレダ」「絶ったれ競技会」のような緩の力を誇張する話ったれ話、「ごんぼー」「百一ぼか」のような失敗をものともしない愚か息子の話、そして「よくばり和尚さんとかしこい小僧」のような弱い者が強い者を智恵でねじ伏せる小僧話など、笑いの中に庶民のたくましさが見え隠れしている。新六さん自身も一番得意なのが笑い話のようで、

《小さい頃に、とっけ（おどけ者）という綽名をつけられていますが、とにかく人を笑わせるのが好きですね》

と語る。まさに新六さんの語る笑い話は新六さんの気質と語りが一体になって今に伝えられているともいえるだろう。

（『みやぎ民話の会叢書第四集　新六ずんつあんのおもしゑ話』P.243-3）

小松仁三郎（こまつ じんざぶろう）【叢書第七集】

昭和七年（一九三二）宮城県加美郡小野田村字北鹿原川前（現加美郡加美町鹿原川前）に、八人兄弟の第五子として生まれる。川前の小松家は山奥の一軒家で、母方父方の祖父母が同居する十五人の大家族であった。二人の祖父からは川漁や狩猟を教えられ、二人の祖母からは昔話や伝説を聞かせられる。少年時代から木伐りや炭焼きなどの家業を手伝う。青年時代、民謡歌手を目指して鳴瀬町野蒜の後藤桃水のもとに通い、その助言によって相馬盆踊りと小野田甚句を小野田に根づかせる仲介をする。また、水車による水力発電を自力で開発し、「電気おんつぁん」と呼ばれ、近在の山奥の集落から呼ばれて水力発電設置を請け負う。その後、実家を出て鹿原の集落で、呉服・洋品・雑貨の店「小松呉服店」をかまえ、商品を自転車に積んで山奥の家々を行商する。店の看板の字を書いてもらったのが縁で、小学校教師のちくささんと結婚、一人息子にめぐまれる。ちくささんを学校に送り出すと、子どもを背負いながら家事、店番、行商などをこなす。そんななか、粉ミルク・洗濯機・電気釜など、当時最新の製品を村で最初に購入し活用したのが仁三郎さんであった。四十代後半、みやぎ民話の会の採訪を機に民話を語るようになる。その後、子どもたちが集い、ちくささんが習字を教えたり、仁三郎さんが民話を語り聞かせるために、三十畳の専用の部屋を新築し、ことあるごとに民話語りを続ける。まるで「民話」のような人生の土壌から、豊かな「語り」を芽吹かせ、大きく育てあげた語り手である。

小松仁三郎さんは、山また山の一軒家で生を受けて誕生されました。

こうして山奥で育った方は、沈黙する山々に溶け込むように寡黙になる場合と、山々の沈黙に負って声を上げつづけ、豊饒な語りの世界を、みずからの内に形成される場合があるのではないかと想います。仁三郎さんの場合は後者です。それはまた、荒おいかぶさる自然と闘うエネルギーを生み、新しい世界に羽ばたこうとする熱望を、仁三郎さんのなかに育んでいったかのようです。

ですから、仁三郎さんの人生そのものが、いわば「民話」であり「語り」というものは、こうした土壌のなかで萌芽するのだと思わせられました。

（『みやぎ民話の会叢書第七集　どーびんさんすは　さるまなぐ』はじめに）

《佐藤 玲子（さとう れいこ）【叢書第六集】

昭和六年（一九二八）宮城県栗原郡一迫町真坂（現栗原市一迫真坂）に生まれる。かつては肝入りもつとめた大農家に、五人兄弟の第三子として育つ。父は役場勤めのかたわら、家の使用人たちに昔話などに託した教えを毎夜語り聞かせており、玲子さんの昔話はこの父から伝えられたものである。同じ真坂の佐藤家に嫁ぎ、家業の農業・酪農から、舅姑の世話まで、休む間もなく農家の嫁として努める日を送る。夫金徳氏が急逝された後、みやぎ民話の学校（みやぎ民話の会主催）で語ったことを契機として、父から受け継いだ昔話を地域の小中学校などで語り継ぐことに力を注ぐ。その人に宿った昔話は、「歳を重ねることで胸の内で醸され、熟し、そして枯れてくる」ことを、身をもって知っている方である。

「昔話は、もっと歳をとらないと語れないんでねぇべか。話が胸のうちで、まだ生ま生ましてて、醸ってこないのっしゃ。熟して、それから枯れるんでねぇべか。もう少し、時間が欲しいがすちゃ」

当時、五十歳を過ぎたばかりの玲子さんは、度々、こう言われました。この言葉はわたしの胸に長く残りました。記憶している民話をただ語って聞かせるのではなく、語る人の内部で年月かけて醸され、それが枯れるときに、物語はもっとも光芒を放つのだということを、玲子さんはからだで知っておられたのでした。語りが持っている力とは、それを語る人の内なる世界観に深くかかわっているのだということを知りました。

（『みやぎ民話の会叢書第六集　むがす　むがす　ずぅっとむがす』p.297）

千葉 直次（ちば なおつぐ）【叢書第八集】

明治四十二年（一九〇九）宮城県栗原郡鶯沢町南郷字町田（現栗原市鶯沢南郷町田）に生まれる。八代続く農家に、七人兄弟の三男として育つ。多才多趣味であった祖父は、身につけた民間医術の腕を見込まれ、農業のかたわら人や家畜に施療していたが、直次さんの話は、往診の道すがらなどに、この祖父から伝えられたものである。高等小学校卒業後、家の農業を手伝いながら、一時期細倉鉱山に勤め、結婚して三子をもうける。戦時中は二度の兵役をつとめ、戦後は子のない兄の跡を継いで千葉家の当主となり、農業に専念する。六十歳過ぎから多彩な趣味を磨き、書道、茶道、俳句、短歌、ちぎり絵、陶芸、謡、篆刻、盆栽と忙しく活動する。平成八年（一九九六）八十八歳で逝去。いかにもみずから楽しんで語っているというのが、直次さんの語り口であった。

直次さんから最初に聞いた民話は、「カニの敵討ち」だった。「サルカニ合戦」の一種なのだが、非常にリズミカルで、独特で、こんなサルカニ合戦もあるのかと驚いた。普段話している口調が、「むかーし」という出だしとともに日常から飛躍したような改まったものになり、さらに話が進むにつれて、声や表情がくるくる変わる。直次さん自身、いかにも楽しんで語っているような雰囲気があった。「カニの敵討ち」だけでなく、いきいきした擬態語・擬声語が入る民話が多かった。

（『みやぎ民話の会叢書第八集　土地に根ざした民話』p.255）

砂金範男（いさごのりお）【叢書第八集】

明治四十四年（一九一一）宮城県遠田郡大貫村大字蕪栗字林内（現大崎市田尻蕪栗林内）に生まれる。蕪栗沼近くの旧家砂金家に、七人兄弟の五子であり家督の長男として育つ。範男さんは待望の男子として父に可愛がられ、その昔話の多くはこの父から聞く。小牛田町中埠から嫁いできた藤子さんとの間に子供六人をもうける。蕪栗沼などの湿地原野が干拓されていくなかで、一家で農作業に励む。平成四年（一九九二）八十一歳で逝去。土地と暮しに結びついた昔話の姿を、その語りに体現していた方である。

湿田の仕事の大変さや家族の結び付きなど、軽いタッチで語られる範男さんの昔話の後ろに、きびしい現実と日常がある。また、範男さんの民話は、一口話のような短い笑い話も多い。蕪栗沼はガンの飛来地として名高いが、愛鳥家に大事にされるガンやカモも農家の敵であることもある。明るさと軽さ、聞く者が思わず大笑いしてしまう範男さんの独特の民話は、蕪栗沼や加護坊山など地形を抜きにしては語れない。

（『みやぎ民話の会叢書第八集　土地に根ざした民話』p.254）

永浦 誠喜（ながうら せいき）【叢書第十集】

明治四十二年（一九〇七）宮城県登米郡南方村青島屋敷（現登米市南方町青島屋敷）に、六人兄弟の第二子、そして長男として生まれる。姉きみゑさんとともに、すぐれた語り手であった祖母よふさんから、物心つくころから昔話を聞いて育つ。誠喜さんが記憶する二百数十話にものぼる話の多くは、祖母よふさんから伝えられる。他に祖父、父、母、そして手間取りに来た村人などからも話を聞いている。小学校中学年から、雨天時の体操の時間は昔話の語りあいであったが、次第に誠喜さん一人が語るようになり、誠喜さんも改めて祖母に話を語ってもらい、記憶を甦らせながら語りにのぞんだ。この小学校三年間の昔話語りが、誠喜さんに語る楽しみを教えたという。高等科に進むころから農業に関心を持ち、それから生涯、地域の農業のあり方を模索し、振興する活動に力を注ぐ。野菜の種の共同購入や新種の作物の栽培・指導などの先頭に立ち、農林大臣賞を一度、知事賞を二度受賞している。かたわら民謡・神楽を愛して、民謡大会の審査員をつとめ、「南部神楽保存会」を作って毎年神楽大会を開き続ける。さらにみずから提案して「南方町歴史民俗資料館」設立に尽力して初代館長を務める。また誠喜さんが提案し、個人が栽培した花菖蒲の株を持ち寄った花壇は、国の奨励金を受けて町の事業となり、いま「花菖蒲の郷公園」として毎年広い園内に花菖蒲が咲き誇っている。平成十四年（二〇〇二）逝去。誠喜さんの昔話は戦時中、同じ部隊の人々にとってもかけがえのない励ましであったという。

お子さんは勿論、お孫さんにも折りに触れて語ってきたということですが、十五年ほど前、本吉郡本吉町へ採訪に行った時にお目にかかった佐藤伸悦さん（大正十三年生）が、「軍隊にいたとき、永浦さんの昔話を聞いた。あの人はみんなから慕われていた。軍別対抗のマラソンなどにも強くて、宮城県は優勝した。永浦さんはゆっくり走るんだけど強かった」と言われたのには驚きました。そのことを永浦さんに尋ねますと、「そんなこともあったようですね」と言って、なつかしそうに目を細められました。

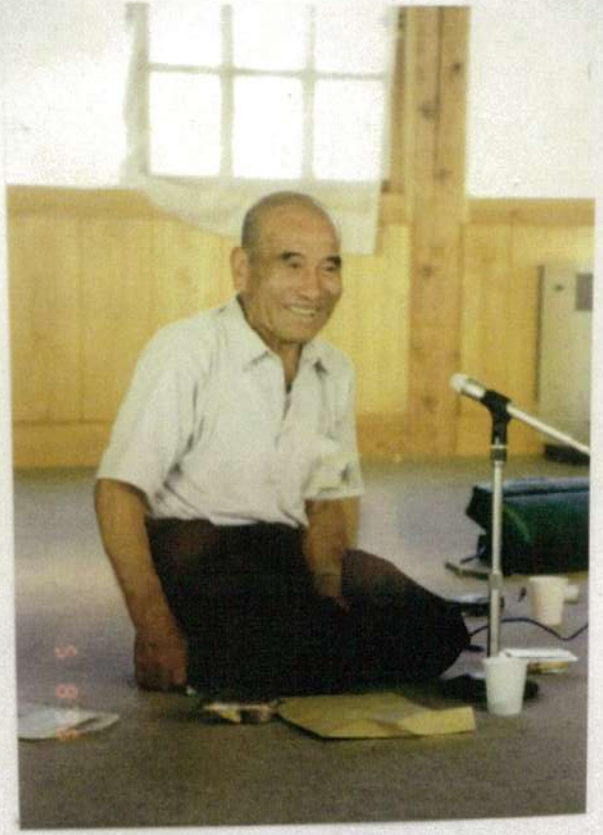
「戦地には行かなかったが、昭和二十年（一九四五）一月に召集令状が来て、三六歳で青森駐屯部隊に入隊したんですよ。そこで終戦を迎えたんです。

日曜日休みの日にね、炊事担当の兵隊が『休みだから、明日はうまいもの食わせるから、昔話聞かせろ』って言われて、して、語ったんだね。みんな自分の村を離れて来てっから、なつかしがってね。昔話もする、浪花節も語る、民謡も唄う…」

かつて小学校の教室で語った永浦さんは、今度は軍隊の舞台で独演会を演じておられたのでした。

佐藤伸悦さんが、永浦さんの民話を聞いて、「気持ちが沈んでいるような時、励ましになった」と述懐しておられたのも忘れられません。また、「ゆっくり走るんだけど強かった」という永浦さんのマラソンでの走り方は、永浦さんのお人柄そのものだと感じました。一歩一歩、しかし、先見の明を持って着実にゴールへ向かう姿は、永浦さんの人生に重なってきます。いつもまわりのこと、みんなのことのために力を惜しまず、走りつづけたその姿に、どんなにたくさんの人が励まされてきたことかと思います。

（『みやぎ民話の会叢書第十集　青島屋敷老翁夜話』pp.256-7）



佐々木トモ（ささき とも）

大正十年（一九二一）岩手県上閉伊郡遠曽部村字白石（現遠野市宮守町遠曽部白石）に生まれる。五人兄弟の末子、男子四人の後の年の離れたひとり娘として育つ。父はトモさんの生まれた年に逝去。トモさんは父の顔を知らず、その記憶も無い。幼いころは毎晩、祖母モトさんの布団に、トモさんとすぐ上の兄と長兄夫婦の子二人が入り、寝ながらモトさんの昔話を聞かせられる。これはトモさんのなによりの楽しみだったという。小学校の分校に通うようになると、片道一時間の道すがら、友だちと肩を組んで歩きながら、友だちに祖母から聞いた昔話を語って聞かせる。また学校近くの母の実家に泊まりに行くと、同年代の従姉妹二人に、一緒に寝ながら昔語りをして聞かせるのを楽しみにしていた。十七歳で、山一つ越えた湧水に嫁ぐ。嫁入り前には白石金山に日当四十銭の鉱山仕事に出かけ、嫁入りのための帯や着物を自分で揃える。嫁ぎ先では家事とともに、山を切り拓き土地を起こして田んぼを作るため、小さい体にモッコを担いで開墾にあたる。そんな厳しい家業の合間の夜なべ仕事でも、姑にせがまれ、義弟義妹にかこまれて、トモさんは昔話を語る。大きな時代の移り変わりを身を持って体験してきたトモさんの人生には、つねに昔話がそのかたわらにあって、生きつづけたのである。

焼畑に粟や稗を蒔いた時代、米を獲れるのはわずかな沢田くらいであった時代、米を獲りたくて田圃作りに汗を流して開墾した時代、遠ヶ石川上流にダムができて、だんだんに安定した米作りができるようになった時代、そして、米の田圃から寒冷地に適したワサビ田に変わっていった時代、産業構造の時代の移り変わりを、トモさんは身をもって体験してきたのでした。

そんなくらしの中でも、トモさんの昔話は生きつづけました。

嫁ぎ先のお姑さんがトモさんから昔話を聞きたがって、夜なべ仕事になると、「嫁（あね）や、むかし語れ、語れ」と言ってせがまれたというのです。幼かった義弟や義妹もそばに寄ってきて、藍の根っこをいぶしいぶし明かりをとって、トモさんの語りに耳を傾けたということです。

辛い日、楽の日、嫁時代、そして、母になり、祖母になり、その間もずっとトモさんの昔話はそこにあって、トモさんの人生を彩り、慰めを与え、楽しみを分ち合う働きをして、いまなお生きているのです。

（『佐々木トモの語りによる　宮守物語―早池峰山麓の民話―』pp.274-5）

佐々木健（ささき つよし）

昭和十二年（一九三七）岩手県上閉伊郡宮守村大字下宮守（現遠野市宮守町下宮守）に、代々女系でオシラサマを守る巫女職の家柄であった佐々木家に生まれる。五人兄弟のうち三人が幼くして亡くなり、兄廣さんと二人兄弟として育つ。健さんは祖母さとさんに可愛いがられ、その背に負われながら、寝かしつけられながら、さまざまな昔話を聞かせられて育つ。国民学校では一年から三年まで担任であった熊谷まつ先生から授業の合間にさまざまな話を聞き、祖母の妹にあたる「吉沢のばあさま」が来ると笑話や艶話を聞かせられた。また、釣りの達人熊蔵さんからは、魚釣りをしながら伝説・世間話や祭祀行事にまつわる話を、大工の熊定さんからは、ほら話・大話を聞いている。健さんは中学校卒業後、生家を離れて岩手県立盛岡第一高等学校に入学し、その後上京して法政大学社会学部に学び、昭和三十七年卒業。その後、全日本官公労組連合会中央本部（書記局）に五年間勤務し、昭和四十二年に宮城県の利府郵便局に務め、その後仙台市内の郵便局に移り、平成十年（一九九八）仙台中央三郵便局を定年退職される。郵便局員であった昭和六十一年、みやぎ民話の会会員の採訪を受けたのを契機に、記憶の底に沈んでいた昔語りの数々が一気に目覚めてよみがえる。その後、その話をさまざまな場で語る活動を始め、退職後は民話の語り手を養成する活動にも心血を注いでいる。幼いころから語りこめられた祖母さとさんの昔語りは、健さんのうちに棲みつき、一度は背を向けて広い世界に旅立った健さんを、そこで養った眼をたずさえて、またその昔語りが息づく懐に舞い戻らせたのである。

中学校を卒業した佐々木さんは、昭和二十八年高校進学のため盛岡に移り、さらに上京して大学生活を送ることになり、昔語りの世界はいっそう遠のく、というよりも、昔語りの世界に背を向けることになったと言うべきかもしれない。だが、家として背を向ける恰好になっていても、物心つきはじめた頃から語りこめられたさとさんの昔語りは、佐々木さんのうちに棲みついて、その後の佐々木さんの遍歴の中でも、節目節目には顔を出して、佐々木さんの心を揺さぶっている。

職場の労組に関係していた頃のこんなエピソードも興味深い。

《三十代で郵務部長のポストにいたM氏と話し合ったことがあるんです。もちろん、労使としてですよ。その人は、「日本人はなぜが外来のことばでものを考える。そこがいけないのではないか」ーとこういう発想をする人で、わたしたちの演説を見てたんでないかと思うんです。その時一回、わたしたちが話してることばの吟味ってゆうか、生（なま）のことばでものを考えるってことは何だべなって、考えたことあったんです。それがずっと頭にあって、今回、昔話を語ってて、生のことばでね、自分が育った時のことばでね、他所から取ってきたものでねえことばでね。これが大切だったんだなあ、このことが欠けてたから、わたしの話は言いっ放しで終わってたんだなあと思ったんです。みなさん（採訪者）と話すようになって、とうとうと演説ぶつという事のものは、わたしには嘘の自分だったっつうことわかるんですよ。》

あらゆることを、「はど」の世界に凝縮して受け止めていたさとさんの懐へ、佐々木さんが舞いもどられたと言ったら言い過ぎだろうか。当然だけれど、ただ舞い戻ったわけではない。背を向けて旅立って、広い世界を体験して、そこで養った眼をたずさえての舞いもどりである。

（『佐々木健の語りによる　遠野郷宮守村の昔ばなし』pp.33-4）

《佐藤とよい（さとう とよい）

明治三十五年（一九〇二）山形県西置賜郡南小国村大字泉岡に生まれ、三人兄弟の第三子として育つ。祖母ゆきさんからは手仕事や夜なべ仕事のかたわら昔話を聞き、腕のいい鉄砲撃ちである父麟松さんからは山話・川話を聞く。麟松さんが四十一歳の若さで急逝した一ヶ月後、とよいさんは十六歳で大字小玉川字長者原の佐藤勇さんに嫁ぐ。婚家では田畑・養蚕の仕事の他、温泉場への荷物運び、山菜採りなど寸暇を惜しんで働き、姑つとめでも心を砕く。五女二男の七人の子に恵まれるが、終戦直後に次女と三女は十八歳と十九歳で夭折される。終戦前後の食糧難だった五年ほどの間に、とよいさんは四回の葬式を出す一方、東京大空襲で焼け出された義弟の一家をむかえて、十六歳を頭に四胎（よほら）の子十人を育てる。とよいさんは子育ての時期、草取りや繕い物などで手を動かしながら、子どもたちを周りに座らせて昔話を聞かせていたという。一方で、昭和六年に東北帝国大学の学生であった三人の登山者を手厚く世話したのを始めとして、飯豊山登山の宿として、全国から学生登山者が佐藤家を訪れるようになる。それが縁となり、かつて登山者であった医者たちに、とよいさん自身も家族も何度か診察を受けて命をすくわれる。昭和三十九年、夫勇さんが脳溢血で亡くなられる。とよいさんが八十歳を過ぎたころ、頼まれて小学校の子どもたちに昔話を語って聞かせる。それをきっかけに、とよいさんは昔話を思い出してはノートに書きためるようになり、それが『とよゐのむかしかたり』（昭和六十二年　おぐに鼓友塾刊）として出版される。平成九年（一九九七）逝去。山奥の村をその世界として生きたとよいさんの小さな身体の中に、おどろくほどゆたかな昔話の数々が、地下水のように生き続けていたのである。

とよいさんは山奥の村で生まれ育ち、九十歳になる現在まで、そこからほとんど一歩も外へ出ないで生きてきた方です。そのとよいさんの身体の中に、こんなにゆたかな昔話の数々が住みついていたことを知って、ただおどろくばかりです。

とよいさんが記憶していた昔話の数の多さということだけではなく、何百年をかけて、ひっそりと語り継がれてきた昔話が、とよいさんの口をついでほとばしるように外へ出てきたとき、わたしは昔話が持っているつよい生命力に触れる想いがしました。

日本文化の高い峰を支えた無名の人たちの、生きる喜び、厳しい自然への畏れ、共に生きる動物たちへの愛、苦難を生き抜くための活力に満ちた笑い、これが一つ一つの話のすみずみに宿って、まことにやさしく光を放っています。地下水が刻々と流れつづけて、わたしたちに恵みをあたえてくれるように、遠い先祖が語り継いできた昔話の数々も、汲みあげてその光を受けとってくれる人を待って、ひそかに生命（いのち）を燃やしつづけているのだと思わずにはいられません。

（『山形県飯豊山麓の民話　長者原ざ囃夜話』pp.2-3）

佐藤とよいさんの世界は長者原である。

いまも、ぼろ布をつめたダンボール箱を椅子のかわりにして、ちょこんとすわってよく窓の外を眺めている。

「ばあちゃん。そこで何しった」

田から上がってきた人が声をかけると、とよいさんは笑って返事をするのだそうだ。

「おれ、ここで世間ば見おろしていた」

日長一日そこにすわって目に入るのは、山であり、田であり、空であり、ただに長者原の自然である。これが、とよいさんの全世界だといってもよい。

（『山形県飯豊山麓の民話　長者原ざ囃夜話』p.324）

《 楳原 村男（うめはら むらお）

【叢書第十一集】

大正八年（一九一九）宮城県栗原郡鳥谷崎村大字深谷字日照田（現栗原市栗駒深谷日照田）に、三人兄弟の第一子、長男として生まれる。家督ではない父は土地を持たず、大農家に年契約で働きにいき、母もイグサ織りの仕事などに出る。村男さんは幼いころから、外に出ている父母の留守を預かり、四つ五つまで「えんつこ（藁で編んだ保育器）」に入って来客の応対をした。村男さんの昔話の多くは、父に金を借りに来た善助さんから、父の帰りを待つ間にえんつこの中で聞いたものである。小学校には妹二人を連れ、子守しながら通学する。妹たちに手がかからなくなると、大農家の手伝いにいき、いろいろな人から昔話や作業唄を伝えられる。十八歳で栗駒町の米屋に勤め、仕事に励むかたわら、当時盛んであった弁論に興味を持ち、青年団の雄弁会に参加する。昭和十五年（一九四〇）二十一歳で徴兵検査を受け入隊、仙台の部隊で初年兵の教育係をし、二十四歳のとき士官の命で陸軍中野学校に入り、昭和二十年の敗戦の日まで、憲兵として国内で軍務に服する。戦後は地域の世話役としてさまざまな役職をこなし、各地に呼ばれて唄を歌い昔話を語る。平成二十一年（二〇〇九）逝去。村男さんはくらしの中のわらべ唄・仕事唄を愛してやまなかったが、つねにその声の中に、くらしの風景を見ていたのである。

村男さんは昔話のほかにたくさんの唄を、その良い喉で艶やかに唄ってくださいますが、これらの唄のうち、とくに仕事唄は十二、三歳の頃、仕事をしながら聞いて覚えたものだということです。春に田を打てば田打ち唄、田植えをすれば田植え唄、夏に田の草取りをすれば田の草取り唄など、常に唄に合わせて仕事をしたのだといいます。なかでも、村男さんの十八番は「杓子舞い唄」です。これは、刈り取った稲をニオと呼ぶ高い組木に掛けていくとき、下から稲束を渡しながら、渡すリズムに合わせて唄ったものだそうです。その時の情景が忘れられないとなつかしんで話して下さいました。

（『みやぎ民話の会叢書第十一集　楳原村男翁の唄と語り』pp.287-8）

只野とよ（ただのとよ）【叢書第五集】

大正三年（一九一四）宮城県志田郡松山町（現大崎市松山）に生まれる。三人兄弟の第一子、長女として育つ。すぐ下の妹とは年が離れていて、妹が生まれるまでは毎晩父母に抱かれて昔話を聞かされる。退役軍人であった父は、虚弱なとよさんを付近の山川に連れ出し、釣りや焚き火をしては、さまざまな話を聞かせた。母は歌が好きで、縫い物などのかたわらわらべ唄や唱歌などを歌い、また年中行事や古い習俗などをかたく守る人であった。伝統と新しさを合わせ持つ城下町の自由な空気の中で、とよさんは幼稚園・小学校・女学校とのびやかで楽しい学校生活を送り、話好きな先生からはいろいろな物語を聞く。女学校卒業後結婚して東京に移住。夫の出征と空襲で松山町に帰郷するも、昭和十九年に夫がテニアン島で戦死との知らせが届く。その後、再婚して小牛田町青生の法円寺に嫁ぐ。晩年は幼稚園や小学校に招かれては、子どもたちに昔話を語り、わらべ唄を歌い、昔の遊びを教えることに力を注ぐ。平成二十年（二〇〇八）逝去。最後まで、歌と遊びが大好きで、明るくてきかなくていたずらっ子の「とよこちゃん」だった。

とよさんの子どもの頃は、冬になると、女の子のいちばんの遊びがおんぎゃぎつき（お手玉）でした。子どもたちは小学校に入った頃から、六年生頃まで、学校へも毎日持っていって、夢中でつきっこしたといいます。

「わたしは、子どもの頃うんとぎゃぎつきしたから、いまも足腰痛くねえの。お手玉は手足を使うし、どこでもできて、危なくないし、学校で教えっといいのよねえ。」

とくり返し話されるとよさん。暇をみては、小さな矩嬢に入って、お土産に持っていくお手玉づくりに余念がありません。

お手玉は、寺の地蔵さまに上がった赤い布や、棟上げの時のいらなくなった旗でつくられたものも混ざって、色とりどりに袋につめられ、出番を待っています。

いつお訪ねしても、たちまちいたずらっ子のとよこちゃんにかえって、歌い、語って、私たちを子どもの世界へ連れていって下さるとよさん。

幼い頃、たっぷりと遊んで遊びぬいた、とよこちゃんがあったればこその思いがします。

（『みやぎ民話の会叢書第五集　唄ってけらえん　語ってけらえん』p.3）

《

伊藤 正子（いとう まさこ）【叢書第九集】

大正十五年（一九二六）宮城県登米郡新田村大形（現登米市迫町新田大形）に生まれる。長沼のほとりの大農家に六人兄弟の第五子として育ち、生家の母から多くの昔話を伝えられる。母よしのさんは、南方町の実家でその母永浦よふさんから昔話を聞いている。このよふさんが直接昔話を語った孫に当たるのが、宮城県の代表的語り手の永浦誠喜翁である。正子さんは女学校卒業後、隣家の伊藤家に嫁ぐも、同年に夫正男さんが出征。戦後夫は復員し、正子さんは嫁として婚家の農作業に精励しつつ、三女一男をもうける。冬期の藁仕事のかたわらなどに、子どもたちに昔話を語り続け、みずから文字化した民話集が地元公民館から刊行される。その後、地域の小中学校・施設などから求められ、昔話を語るようになる。次女京子さんが三十四歳で夭折された後も、地域の世話役をつとめ、多方面からの求めに応じて、昔話を語り続けている。祖母よふさん、母よしのさん、そして正子さんへと伝えられて、『母の昔話』は語り継がれているのである。

幼い日に母に聞いた昔話。その母が祖母となって、娘の幼い子に語る。それを、母になった娘がともに耳を傾ける。よしのさんは、こうして「母の語り」をずっと聞いて暮らしたのだといいます。こんなふうに身体の奥深くしみついた「母の語り」を、こんどは、自身の子供や孫に語りつづけられたのでした。

正子さんもまた、幼い日に聞いた昔話を、こんどは、その母が孫に聞かせているのを、末の弟さんといっしょに「嫁にいくまで」ともに耳を傾けたといっておられます。「母の語り」は、時間が移っても、たえず暮らしとともに生きていたのでした。そして、直接に語ってもらう孫だけではなく、大人になっても「母」を慕うその子らみんなの心をとらえていたことを物語っています。

このように、「母の語り」は、息の長い命を持って、「娘」の成長とともにありつづけるのだと思います。

秋から翌春までの長い冬の夜を彩って、「母の語り」は営々とつづくのでした。

（『みやぎ民話の会叢書第九集 「母の昔話」を語り継ぐ』p.401）

山内 郁（やまうち かほる）【叢書第十二集】

昭和四年（一九二九）宮城県本吉郡入谷村字林際（現本吉郡南三陸町入谷林際）に生まれ、七人兄弟の二男、第三子として育つ。幼少期は祖父、曾祖母も同居する十一人の大家族であった。郁さんは、家の大人たちそれぞれから、さまざまな言葉の伝承を受け渡される。安政（一八五四 - 六〇）生まれの曾祖母は、縁側でくず繭を引き伸ばして真綿を作りながら自分の体験談を語り、嫁入りして曾祖母の横で同じ仕事をするようになった母は多くの昔話を聞かせた。夜は祖父の寝床に入り、寝ながら体験談、伝説、昔話、山内家の歴史など、あらゆる話を聞きながら祖父と寝る毎日を送る。祖父は物語や講談を独得の節で読みあげる「小説読み」を聞くことを無上の楽しみとしており、十月から十二月の晩、そして正月は近所の年寄りたちも寄って、父が読み上げる小説読みが催された。それをかたわらで聞いていた幼い郁さんは、就学して文字を習うにつれ、「小説読み」に使う物語本・講談本を「見る」（黙読する）ようになる。小学校時代は一方で母が語る昔話を聞きつつ、本を濫読して過ごし、やがて本で見た物語を学校の友だちを集めて語り聞かせるようになる。さらに郁さんの周囲では、若者の「夜遊び（夜の寄合）」、屋根葺き手伝い、年越しの晩、「坊さま」と呼ばれる芸能者との交流など、さまざまな場面でさまざまな話が語り聞かれた。昭和十九年国民学校高等科を卒業し、志願して東京の軍需工場に就労。翌年東京大空襲を体験し、「命を拾って」入谷に帰るや、志津川の空襲も体験する。戦後、長兄憲さんの戦死公報が届き、次男であった郁さんは家督となり、夏場の農作業と冬場の出稼ぎによって、山内家の生計を支える。二十八歳のとき、同郷のハルミさんを妻に迎え、二男一女に恵まれる。成人後も家業の合間をぬい、地域の古老を訪ねて話を聞き、その話の場所を訪ねて現場を確認する「一人歩き」を続ける。そうした蓄積から、志津川や入谷を研究対象にする研究者との交流が生まれ、郁さんも図書館に通いつつ郷土誌研究を志すようになる。その努力は、幻の郷土誌と呼ばれた『入谷物語』諸本の発見と入谷郷土史研究会による解読に結実する。また平成六年（一九九四）ころから、「民話の語り手」として依頼され、入谷の伝承話を地域の外で語るようになる。また同年に整備された民家資料館「ひころの里」の管理所長に採用され、屋敷の案内をしながら、乞われればが端で「むかし語り」をする。しかし郁さん自身は最初から、くらしの伝承から離れた興行的「民話の語り部」であることに背を向け、「土地の語りの伝承者」としてのみ、みずからの立ち位置を見出しているのである。

語りの場は、いつどこでと特定できないほど日常の営みに織り込まれ、だからこそ、ことさら特別な行事や面と向かった教えとして、昔話のみを語り聞かせることはない、それが郁さんの伝承の個性であった。つねに話は、土地の暮しと織り合わされており、暮しの言葉による現われが話に他ならなかった。

郁さんが「伝説はその場所に行って語らなければ意味がない」と考えるのも、「語り口が洗練されて聞きやすくなるともとの言い伝えから離れてしまう」ように感じるのも、話が暮しの伝承全体から遊離隔絶されてしまうことへの不安と違和感に根ざしているであろう。だからこそ郁さんは、現代の語りの趨勢に背を向けても、「ことさら取りだしてきた話を語るのみの語り手ではない」ことにこそ、伝承者としてのみずからの存在意義と立ち位置を見出しているのであろう。

このことこそが、山内郁翁という伝承者の真髄であるように、私には思えるのである。

（『みやぎ民話の会叢書第十二集　山内郁翁のむかしかたり』p.348）

郁さんという伝承者は、昔話の語り手ととらえるより、土地の暮らしの伝承者であり、その伝承を土地の言葉として語りうるという意味で、土地の語りの伝承者ととらえる方が、よりその真髄に迫れるのではないかと、私は考えている。

（『みやぎ民話の会叢書第十二集　山内郁翁のむかしかたり』p.352）